

全体が凍結したこともあったんや。

どっちみち、俺らの祖先、ホモサピエンスが二〇万年前に誕生したと考えたら、それは何百倍も何千倍も昔の出来事なんや。そう考えてみたら、地球が滅びるより前に、人類が滅んだって、全然おかしくないやん。いや、そう考える方が自然。人類が存在した歴史やん、地球の歴史から見たら、ほんまにちっちゃいことやないか。そんなかで人間が起こす環境問題やん、問題にならんやろ」

一気に畳みかけるように話し、沈黙が訪れる。共感すればいいのか、反論すればいいのか、二人は返す言葉を見つけられずにいた。

「そんなことをこの宇宙は繰り返してきたんや。そしていつかは、この宇宙やって収縮が始まって、無に還っていく。俺ら人間が生きた証やって残らんし、痕跡も残らん。ましてや生き延びることやこ不可能やし、そうしようとするに何の意味があるん。馬鹿げとるわ」

自分ではじめた喧嘩を自分で収めるかのように、結論づけた。

この虚無感が、敦士が学び、考えてきた科学の結論かと思うと、学校に来なくなった意味も少し飲み込めた気がした。

しかし、それを認めることは、これから自分がしようとしていることを否定することになる。描きかけていた自分の将来が、音を立てて崩れていく気がする。それは何としても阻止したかった。

沈黙のあと、美海は言った。

「そやから言うて、何をしてもええということにはならんやろ？」

「美海が言よることやこ、全部、人間のエゴやろ。人間が生きたいように、好きなように生きてきた、エゴ。けど、いざそれが難しくなってきたから言うて、ちょっとでも生き延びられるようにライフスタイルを変えることやって、それも人間のエゴ。みんな無駄なことやわ」

「そんなこと言うたら、」

この島の記憶——

子や孫を想い、生活も、財産も、命までも注いでこの島の再生を願い、闘ってきた先人を否定することは、許せなかった。

「そんなこと言うたら、おじいちゃんらが頑張ってきたことも無駄なこと言うん？」

「おじいちゃんて——」

「おじいちゃんらが命懸けで闘こうてきたこの島のこと、覚えとるよな？勉強したよな？忘れてないよな？私らは直接は知らんけど、実際には何もしてないんやから。でも、私らは聞いたやん。見たやん。それも無駄やったいうて言うん？そんなこと言うんなら、私は許さんから、あっくんのこと、許さんから」

「許さんて——」

そう言って不敵な笑みを浮かべたあと、敦士の表情がみるみるうちにこわばっていく。そして、押し殺すようにぼそりと告げた。

「美海のおじいちゃん、澤村雄一は……」

敦士の口から突然出てきたその名前に、美海は虚を突かれる。

「……澤村雄一は、俺のおじいちゃんや」

「えっ?!」

敦士が刺すようにまっすぐ見つめる目を、茫然と美海は受けとめる。

「——何？あっくん、何言よん？」

「中学のとき、豊島事件の研修で資料館に行ったとき、美海言うたやん。これ、私のおじいちゃんやて。でも、澤村雄一は、俺のおじいちゃんなんや」

美海が、「これね、私のおじいちゃん」と、黒いリボンがついた名前を指さす。刹那、敦士は目を見張り、美海を見つめた。目が合った美海は軽く笑ったあと、その名前を見あげて言った。

「おじいちゃんもこの島を守るために頑張ったんやて」

敦士はゆっくりとその目線を移し、美海の祖父だという名前を見つめた。

中学三年生の秋のことだ。

「えっ、それなに？」

「敦士、どういうことなんや」

「知らんわ、そなん。俺、昔、小さいとき、母さんから聞いたんや。資料館で。これはお前のおじいさんやって。この島を、お前たちを守るために、立派に闘って亡くなったんやって」

「だって、そんな……。お父さんにきょうだいなんて……。おらんかった。それでおじいさんが同じやて……」

美海の思考が混乱し、方向性を失い飛んでいく。

「ほやから俺、中学のとき美海が言うたあと、なんでやろうって、ずっと考えとって……」

「お母さんに訊いたんか」

「訊けるわけないやろ、そんなん」

もし訊いて、何か不都合なことが明らかになるようなことがあれば……。そう思うと、訊くに訊けない気持ちも分からないでもない。

「なあ、あっくんのお父さんの名前は何ていうん？」

「あ、それや、それ」

「うちの父さんの名前は康二」

「……それが、俺、父さんのこと、何も知らんのや」

「何も知らんて、名前ぐらい……。写真とか」

「それが、何も聞かされてないんや。俺が赤ちゃんのときに死んだいうだけで。記憶にもないし、何もない」

そう言うのと、部屋中を探すように見渡した。美海と弘章も、そういえば、と思い返して部屋の中を眺め直してあらためてそのことに気づく。

「うちの父さんもや。私が赤ちゃんのときに亡くなっとる」

「それいうて……」

家族構成は互いに分かり合っていた。幼いときから長い時間、きょうだいのように過ごしてきたから、それはあまりにも自然な事実だ。しかし事実と理由は異なる。理由までに関心を寄せられてはいなかった。

手がかりを見つけられず、黙り込む。部屋の空気が沈み込む。

もし本当に敦士の祖父と美海の祖父が同一人物で、美海の父親にきょうだいがいないとなれば、美海と敦士は異母きょうだいということになる。口には出さないが、みんなが同じことを思っていた。しかしそれを口にすることは躊躇われた。安易に口にしていることではない。

「——なあ、もしかしてあっくん、それで学校に来んようになったん」

美海の言葉に、弘章は初めて気づく。

「——」

敦士の無言が、すべてを物語る。

「なんで今まで言うてくれなかったんや」

弘章が言う。しばらくして、美海も言う。

「——言うてほしかったわ」

聞かされる美海の気持ちを考えると見えなかった。しかし、美海の気持ちも分かる。そんなこと言えるかよ、と言おうとして止めた。代わりに、ごめん、と敦士は小さく言った。

まだすべてが明らかになったわけではない。何かの間違いであってほしいと願う。窓の外の雨が、強さを増していた。

*

「雨、激しいなってきたねえ」

美海に向けてのものか、祖母節子に向けてのものか、母が誰にともなく言う。

夕食時のニュースに続いて流れる天気予報で、今後の天気の見通しについて解説がされる。いつもの天気予報士が、いつもとは違って少し緊迫した様子で伝える。今夜がヤマだという。

「一年を通して温暖で降水量が少ない」というのが、瀬戸内の気候とされてきた。しかしこの数年、瀬戸内のどの県でも大きな豪雨災害が起きている。数年前の隣県の豪雨災害は特に酷かった。もうすでに、「降水量が少ない」は、撤回しても良いのではないかと思えてくる。これも地球温暖化の影響なんだ、と思う。もうこれ以上この星を、この島を傷つけないで、と思う。

家に帰る間も、家に帰ってからも、美海は逡巡していた。傷ついた自分に決着をつけるために、訊くべきか、どうか。知らないままがいいのか。

いったい父はどういう人物だったのか。これまで母・雪乃から聞かされてきた父親像に悪い印象はなかった。むしろ、良い父親像だ。しかし、自分の知らないところで、それを覆すようなことをしていたとすれば。それを母も祖母も知っているとは限らない。とすれば、母や祖母を傷つけ、苦しめることになる。

言うべきか、どうか。

それでも、感情が抑え切れない。

「母さん、今日、ヒロとあっくんのところに行ってきた」